# 再発見　タックルされたプレーヤー

ラグビーを 3K（きつい、きたない、危険）で面白くないスポーツにしてしまっている一つの原因は、タックルされたプレーヤーの心得違いのプレーにあります。その元は指導者の心得違いにあるというのが正確な原因です。ラグビーは simpler で easier な競技にする努力がなされていますが、一向に成果があがっていません。解決策としては、指導者とプレーヤーひとりひとりの理解と努力を促したいと思います。7 人制ラグビーが世界に受けいれられオリンピック種目になるという現実は、押し合いのスクラムがなく、人数が少ない分だけタックル後ボールの回りに折り重なってごちゃごちゃすることがない方が面白いということです。simpler そして easier を志向することに 15 人制 7 人制の区別はなく、ボールを持って走りまわって、より楽しくという running handling game ラグビーの原点に基づく思想なのです。

ボールキャリアーが、一人または複数の相手プレーヤーに捕まり地面に倒された場合にタックルが成立する。相手プレーヤーで、ボールキャリアーを捕まえて地面に倒しかつ自身も地面に倒れたプレーヤーをタックラーと呼びます。

ラグビーはボールを持って走り手渡し(running handling game)て楽しむゲームで、相手はそれを捕まえて止めることによって点の取り合いをするものです。捕まるということと、地上に倒れるということを同時に一つのことと考えてはいけません。捕まるということと、地上に倒れるということ一連の動作ではなく、大きな変化・相違があります。

タックルされたプレーヤーの考察の前に、捕まる前に、捕まらない努力をするという課題があります。そして、捕まっても身体が地面につく前にできることをする努力へと続くのです。捕まっても倒れないで（倒れるまで）プレーを続けることです。自分から倒れるようなことが絶対にあってはなりません。

プレーヤーが 「倒れる」定義の復習です。
ボールキャリアーの片膝または両膝が地面につけば、そのプレーヤーは「地面に倒された」ものとみなす。
ボールキャリアーが地面に腰を下ろすか、地上に横たわっているプレーヤーの上に倒れていれば、そのプレーヤーは「地面に倒された」ものとみなす。

捕まっても全力で工夫して立っていようと努力をして、状況を判断して、flair を働かせれば、「できること」「しなければならないこと」がいくらでもあります。
そして、それらをしてからです。タックルされたプレーヤーが「できること」「しなければならないこと」あるわけです。それらを復習しましょう。「直ちに」という日本語は原文では immediately と at once の 2 通りに区別されていますので明記しました。
Immediately の間に何もしないでという意味で、at once は時間的にすぐにという内容です。

競技規則　第 15 条 5 項を実際と比べて考察しましょう。

15.5 タックルされたプレーヤー

(a) タックルされたプレーヤーは、ボールの上に(1)、ボールをおおって(2)、またはボールに近接して横たわって(3)、相手側がボールを獲得するのを妨げてはならないし、プレーの継続のため、直ち(immediately)にボールをプレーできるようにしなければならない。
**罰：ペナルティキック**

(b) タックルされたプレーヤーは直ち(immediately)にボールをパスするか(4)、ボールを手放さなければならない(5)。さらにそのプレーヤーは直ち(at once)に立ちあがる(6)か、ボールから離れなければならない(7)。
**罰：ペナルティキック**

(c) タックルされたプレーヤーはボールをいずれかの方向に置くことによってボールを手放すことができる。ただし動作は直ち(immediately)に行わなければならない(8)。
**罰：ペナルティキック**

(d) タックルされたプレーヤーは地面上でいずれかの方向にボールを押し進めること（前方にではなく）によってボールを手放すことができる。ただし動作は直ち(immediately)に行わなければならない(9)。
罰：ペナルティキック

(e) 立っている相手プレーヤーがボールをプレーしようとする場合、タックルされたプレーヤーはボールを放さなければならない(10)。
罰：ペナルティキック

考察
(1)～(3)については偶然に起こったとしても、その状態が続くことはプレーヤーの意思によるものですが、レフリーが、瞬間の偶然と意思による状態継続を区別することは不可能に近いです。観衆もはっきり分からないままに、笛が吹かれプレーが中断されるわけですから面白くありません。味方が不利にならないように、且つ反則をとられないようにそれらのことをすることが上手いのだと教えられ、実行しているプレーヤーがいることは残念なことです。
(4)はパスすることを全く考えていないプレーヤーがいます。練習中にもやっていないというのでは試合では無理なことです。
(5)は「相手が近くにいたら取られるから放さない」と断言するプレーヤーがいますがいけません。
(6)～(7)は壁をつくってボールを確保するために上からかぶさるように倒れこんでくるプレーヤーがいると立ち上がることもボールから離れることもできませんから simple and easy から遠ざかっていくのです。ルールの意図を全く理解していないプレーヤーには、原因は後者（倒れ込んで来た）と判断することを説明して、解決を図る以外にないとかんがえられます。
(8)は身体より味方ゴールラインに近い方とはかぎっていないのです。身体はゴールラインに並行し絶対に味方側と信じているようです。味方のサポートの状況により倒れた身体の顔や頭の前に置くことが有利に展開する場合もあるのです。
(9)は捕まり具合によっては、身体にボールを身体に付けたような状態で倒れることがあります。そのまま持っているのはもちろんいけませんが、身体のすぐ近くに放して置くのは展開継続しにくいからいけません。地上のボールを押し進めて、腕をいっぱい伸ばした状態までボールを身体から離さなくてはなりません。
(10)は相手にボールを取られるのを防ぐ行為は当然と思っているプレーヤーがいます。立っているプレーヤーは第 7 条競技方法にあるように自由奔放に活動でもできるのです。タックルされたプレーヤーはプレーが展開継続にプラスになることだけできるのです。

以下 15 条 5 項の(f)および(g)については論点から逸れますので本稿では省略します。

2008. 10. 18
西川　義行